

## ■研究調査レビュー

奄美諸島地域における考古学覚書  
ー近年の弥生時代～中世初頭の研究を中心としてー  
新里 貴之（埋蔵文化財調査室）

## 1. はじめに

奄美諸島の考古学は、近年、著しく進展している。徳之島ガラ竿遺跡におけるAT火山灰層（約25,000年前）下位の旧石器の発見や、古代のヤコウガイ交易論の展開、中世の徳之島カムイヤキ古窯群の発掘成果や消費動向の研究など、重要な研究がなされている。いいかえれば、それまで奄美諸島地域は、考古学的に不明確な部分が多かったことも意味している。

近年の奄美における「古代～中世初頭並行期」の研究状況は、大きく前進してきた。今回は、交易に関する研究を素材に、島嶼地域における国家形成前夜の考古学的アウトラインを概観し、各時代における奄美の物質文化の特性について述べてみたい。なお、今回の遺物の分布は、南西諸島内における変化の把握を中心としたものであり、鉄器や青銅器、ガラス玉などの列島規模以上の分布を示すものにおいても、南西諸島の範囲内で扱った。

## 2. 各時期の研究（交易に関する研究を中心に）

## 2-1）弥生時代～古墳時代並行期の研究

弥生時代～古墳時代の研究は、現在、中世まで含めた木下尚子氏による一連の研究、「南島貝交易」論が主軸となっていると見てよい。この交易システム論は、これまで不明確な文化内容であった南西諸島にスポットを当てただけでなく、南西諸島が貝供給地になっていることが解明され、そのネットワークが、日本列島・朝鮮半島・中国を結んだものであることが想定されている。

縄文時代晩期末より、西北九州地域を交易主体者集団として、沖縄諸島地域を主な生息域とするゴホウラ・イモガイ貝交易が開始さ

れたと考えられており、弥生時代前期頃まで、九州地域に原貝を運搬し、彼の地で製作され、首長層の象徴的アイテムとして用いられていたと考えられている。南海産貝が用いられた要因の一つとして、宝玉に類似していたため、僻邪信仰と結びついたと考えるものなどがある。また、近年では、Helmsの理論を応用し、当時の首長層にとって遠隔地物資の獲得活動こそが重要であり、それが交易の契機となったとする説などがある。いずれにせよ、この交易は、それまでにない情報や物質文化を南西諸島にもたらした。例えば石組を持つ墓の登場はこの時期以後の現象である可能性が高く、また、黒曜石、ヒスイなどは、縄文時代晩期から継続してもたらされている可能性がある。

弥生時代中期になると、九州と南西諸島間の物資の相互間の動きは活発化し、南西諸島へ鉄斧、青銅鏃、ガラス玉、銅剣の茎、石斧、五銖銭などの多種の交換物資がもたらされる。ほかにも交換物資としての酒、米・雑穀類も想定されている。

弥生時代中期段階に、ゴホウラ・イモガイの集積遺構という明確な供給地を示す沖縄諸島にガラス製・石製玉類をはじめ、様々な弥生系遺物が分布することが理解できよう。在来・外来遺物ともに分布域に相関関係があり、在地土器様式圏にもそれぞれの交易による役割を示すかのような違いがあることが分かっている。また、煮沸道具である土器も島嶼部間を移動するが、この移動は交易物そのものではなく、交易集団の移動・一定期間の滞在をあらわす痕跡である可能性がある。中九州・南九州の土器だけではなく、奄美諸島地域の土器も沖縄諸島へと多量に持ち込まれている。これは、奄美諸島地域の人々もゴホウ

ラ・イモガイ交易の何らかの役割を担っていた可能性を示している。この土器の移動方向は北から南方向へ、つまり九州・(大隅)・奄美⇒沖縄である(表1・図1)。

この時期、主に沖縄諸島で採取し、ストックされた貝類を、島内で加工して貝輪を製作するようになっており、交易活動は、前段階より集約的になっていた可能性が指摘できる。また、島嶼部にもたらされる交換物も遺跡によって出土状況の偏りが見られることから、交易を背景とし、既に集落間格差が生じていた可能性も把握される。これは交易貝を大量に採取できる豊富な漁場や、その漁場の権利を保持していたことに起因すると考えられる。このような拠点集落は、沖縄諸島地域でも数箇所に散在している特徴がある。奄美諸島地域には、貝のストックなどはまだ発見されていないが、現状では、粗加工品と製品のみが認められる。奄美諸島地域においても粗加工⇒製品化の貝輪製作工程に携わるとともに、交易の仲介者集団を擁していた可能性は高い。

南海産貝の最大の受容地域であった北部九州地域では、中期後半頃から青銅器などの価値が高まり、貝輪そのものの価値は下がってゆく。弥生時代後期になると、南西諸島地域への交換物資も減少し、貝交易は衰退の観を呈する。しかし、貝は、徐々に本土における需要地を拡大している。この段階まで奄美諸島地域の土器が沖縄諸島地域にもたらされる状況に変化はなく、また、沖縄諸島地域で貝がストックされる状況も変化がないと考えられる。沖縄諸島へもたらされる土器は、九州地域のものが少なくなり、奄美諸島地域のものが目立つようになる。弥生時代後期になると、玉類は大隅諸島～沖縄諸島まで分布する。しかし、その他の弥生系遺物が、沖縄諸島に集中することは、中期と同様である(表1・図2)。

古墳時代になると、九州・本土では、前方後円墳造営にみとれるように、首長層の権威は一層拡大化し、情報網も日本列島全域に拡大するとともに、南海産貝の威信財的価値

の情報もまた、全国規模で再び拡大するようになる。ゴホウラ・イモガイだけではなく多様な貝種が消費されるが、貝の使用量は減じていくのが特徴である。好まれる貝輪やその使用状況は、地域によって異なることも重要である。また、これまでのように、本土で消費されるだけでなく、南西諸島内においてもゴホウラ・イモガイを大量に消費する地域が存在する(種子島広田遺跡)。大隅諸島地域(種子島・屋久島など)の土器はまったく移動が認められず、奄美諸島に、南九州古墳時代前半と後半の土器がわずかにもたらされ、沖縄諸島に奄美諸島のスセン當式がわずかにもたらされている。土器の動きから見ると、貝交易は弥生時代の状況とは質的に異なる可能性があるものの、南西諸島側においては依然、貝のストックは行われている。現状の研究では前段階からの質的变化の把握までにはいたっていない。貝製品などの在来・消費物と外来・交易物の分布が一致し、大隅諸島の在地土器様式圏が南九州から分離する。大隅諸島において大量に消費されるゴホウラ・イモガイの様相からは、対九州・本土とした南島貝文化圏における貝交易の窓口になっている可能性はあるかもしれない。また、在来土器の移動は、奄美⇒沖縄であり、この時期に大隅諸島と奄美諸島の土器のセットが類似することからも考え合わせると、大隅諸島・奄美諸島が仲介者集団としての役割を担っていたのかもしれない。

大隅諸島(種子島)において、ヤコウガイが墓の副葬品に用いられるようになり、分布状況は大隅諸島～沖縄諸島までとなる。さらにこれに加えて、下層貝符は、大隅諸島～沖縄諸島まで分布し(正確には下層タイプ i は大隅・奄美に、下層 ii は、大隅～沖縄)、ヤコウガイの状況と一致する。鉄器は、大隅諸島と沖縄諸島で出土しているが、これも類似した状況になると考えられる。つまり、在来の遺物の最大範囲と外来遺物の分布が一致しており、交易活動の範囲と一致するのではないかと考えられる。しかし、土器様式に関して

表1 南西諸島の遺物分布状況

凡例 「玉類」:石製・ガラス製,「下貝符」:下層貝符,「上貝符」:上層貝符,「オオ」:オオツタノハ貝輪,「ゴホ」:ゴホウラ貝輪,「イモ」:イモガイ貝輪,  
「ヤコウ」:ヤコウガイ・製品,「布目痕」:布目圧痕土器;焼塩土器ではないかとされる,「カムイ」:カムイヤギ陶器,「石鏝」:滑石製石鏝  
※網掛けは南西諸島系の在来遺物。その他は外来品

【●:多量,○:少量】

| 地域・時期  |          |           |        | 大隅諸島(オオツタノハ供給) |    |    |    |     |     |     |     |    |    | トカラ列島(オオツタノハ供給) |    |    |     |    | 奄美諸島(オオツタノハ・ヤコウガイ・カムイヤギ供給) |     |     |     |    |    |    |    |     |     | 沖縄諸島(ゴホウラ・イモガイ・ヤコウガイ供給) |     |     |    |    | 先島諸島 |    |  |  |  |
|--------|----------|-----------|--------|----------------|----|----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|-----------------|----|----|-----|----|----------------------------|-----|-----|-----|----|----|----|----|-----|-----|-------------------------|-----|-----|----|----|------|----|--|--|--|
| 奄美     | 沖縄       | 先島        | 本土     | 世紀             | オオ | ゴホ | イモ | 下貝符 | 上貝符 | ヤコウ | カムイ | 玉類 | 鉄器 | 須恵器             | 石鏝 | オオ | カムイ | 石鏝 | 下貝符                        | 上貝符 | ヤコウ | カムイ | 玉類 | 鉄器 | 青銅 | 開元 | 須恵器 | 布目痕 | 石鏝                      | ヤコウ | カムイ | 鉄器 | 開元 | 須恵器  | 石鏝 |  |  |  |
| 弥生模倣土器 | 貝塚時代後期前半 | 新石器・無土器時代 | 弥生時代中期 |                |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           | 弥生時代後期 |                |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
| 台付壺形土器 | 貝塚時代後期後半 |           | 古墳時代   |                |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           | 6      |                |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
| 兼久式土器  | 貝塚時代後期後半 |           | 古代     | 7              |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           |        | 8              |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           |        | 9              |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           |        | 10             |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
| 類須恵器   | グスク時代    |           | 中世     | 11             |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |
|        |          |           |        | 12             |    |    |    |     |     |     |     |    |    |                 |    |    |     |    |                            |     |     |     |    |    |    |    |     |     |                         |     |     |    |    |      |    |  |  |  |

は、かなり小地域差をもっている（表1・図2）。土器様式から考えると、奄美諸島の弥生時代並行期の土器は、ほぼ甕のみで構成され、形態のみ弥生土器の特徴を備えている。器面調整技法や文様などは、奄美独自のものである。この時期の土器様式の導入は、一般的に、食器のセットとしてだけでなく、形態・器面調整技法などの要素を伴うものであるが、奄美諸島地域における甕形土器の形態のみ採用するといった状況は、全国的にも極めて珍しい現象である。おそらくこれは、奄美諸島地域の生業活動や、外部との接触が主として交易であった社会的背景による現象なのであろう。

## 2-2) 古代並行期の研究

### 2-2-1) ヤコウガイ交易

「ヤコウガイ交易」は、高梨修氏によって提唱されて以来、木下尚子・島袋春美・安里進諸氏の研究者によって進められている。南西諸島地域以外の様子がほとんど分かかっておらず、交易の主体者も判然としない。奄美諸島地域を主として、「貝匙」型貝製品の製作工程の資料を含め、膨大なヤコウガイを出土する「ヤコウガイ大量出土遺跡」が散見される。

南西諸島内において使用状況が判然としないことから、主に外部（日本本土・中国）に螺鈿細工の原料として輸出された交易品であると考えられている。いずれにせよこれまで不明であった奄美諸島地域の兼久式土器段階（古代並行：貝塚時代後期後半並行期：6～10世紀）の様相を描き出したことは重要であろう。特に、近年の高梨氏による一連の研究は、発掘調査から遺跡の解釈論、文献史料を考古学的に追認しようとする姿勢、日本古代国家の国家領域を背景とした交易論、非市場経済の社会状況を経済人類学に依拠して島嶼部の検討を行っている観点などにおいて、切り口が斬新である。また、古代史を論拠とした演繹的方法で考古資料を見直すことによって、歴史解釈の多様性を認識させたことは、貴重な研究視点を提示している。

古墳時代末～古代にかけて（表1・図3）、在来の遺物である上層貝符（7世紀～）が、大隅諸島を中心に沖縄諸島まで分布する。ヤコウガイ製品の分布も同様である。しかし、外来遺物である開元通宝（初鑄621年）の分布は奄美諸島～先島諸島に及び、鉄器の出土は、奄美諸島を主として大隅諸島から先島諸島に及ぶ（しかし、先島諸島では明確な時期

が判断できていない)。このことは、古代の7世紀以降において、奄美・沖縄諸島地域を介して、大隅諸島地域と先島諸島地域までの情報網がリンクした可能性が指摘できよう。前段階から考えると、在来の遺物の分布範囲を超えて、先島諸島まで外来遺物の分布が拡大することは、先島諸島まで交易の範囲に入っている可能性は否定できない。このことは未だ交易を示すような遺跡が先島諸島で確認されていないのか、あるいは全く別のルート（中国など）で外来物が搬入されたことが想定できるのか、現段階では明らかではない。また、9・10世紀頃に土師器の分布が大隅諸島地域～奄美諸島地域、本土産須恵器が大隅諸島～先島諸島となっていることから、古代という長期間に、遺物分布域が多重にズレながら存在するという現象は、物流のこれまでにない情報網・交易網の拡大として捉えられ、それが古代段階にあったことが窺い知れる。この時期、喜界島においては兼久式土器が消失し、本土系の土師器・須恵器で占められるとする池畑耕一氏の指摘が、永山修一氏の文献史学の成果と合致することは重要であろう。極めて隣接した地域で、一部の食器が異なることが判明したことは、今後、隣接地域においても島ごとの地域性を考古資料側からチェックする必要があることを示している。

古代頃には土器の移動はほとんどなく、需要者集団と供給者集団との直接的な交渉による交易、仲介者集団の土器の移動を伴わなくてもよい交易へと質が変化しているのかもしれない。

## 2-2-2) カムイヤキ陶器の交易

11世紀段階のカムイヤキ陶器の窯業は、11世紀頃から開始され、消費動向からみると14世紀前半頃には停止すると考えられている。窯は、数基しか発掘調査されておらず、生産側の状況は詳細には分かっていないが、12支群100基を越える窯が造営されていたとされている。カムイヤキ陶器の製作技法的観点からは、高麗陶器との関連性が、窯体構造

からは、日本中世陶器窯を導入したとするものと、朝鮮半島陶器窯のものとする見解がある。消費動向は、北は鹿児島から南は先島まで分布し、時期によって、鹿児島～先島⇒奄美～先島というように、徐々に島嶼部の南側へと消費動向が偏っていく様相が看取されるという。カムイヤキ古窯が徳之島に設営された要因としては、水・陶土・燃料が揃っていたからとするもの、日本古代国家領域の境界となる性格から、奄美諸島地域が隣接する異国への窓口として機能していた結果であるとするもの、などがある。

このカムイヤキ陶器の交易主体者は明確でないが、流通に携わっていたのは、現在、大きく二つの説が採られている。博多商人と琉球側の商人である。前者は、この時期の博多商人の広域かつ活発な動きを見ると、開始時期としては問題なく考えられ、現在考えられている南西諸島側の社会には、このような交易主体者となるような集団の存在は認められていないことから理解し易い。後者の説は、カムイヤキ陶器の消費地の範囲を、後に出現する琉球国の版図とほぼ一致することを重要視するものである。

11世紀後半段階には、滑石製石鍋が、奄美・沖縄諸島を中心に大隅諸島～先島諸島（玉縁口縁白磁碗の分布も類似）、カムイヤキは奄美・沖縄諸島を主として分布し（一部南九州地域にも分布する）、本土系土師器は大隅諸島～奄美諸島に、布目圧痕土器（焼塩土器とされる）が奄美・沖縄諸島に分布するが、12世紀段階に入ると、大隅諸島～先島諸島における滑石製石鍋・中国陶磁器・鉄器・カムイヤキの島嶼内広域分布圏が安定してゆくことになる。古代末～中世初頭は、在地・土器文化圏が、外来交易物の範囲とほぼ重なる（図4）。そのほかの在地遺物の分布は明確でない。

分布図と表に表された単純な分布図から見ても（他地域は調査密度の問題も絡むが）、奄美・沖縄の様子は、在来の遺物（表：網掛け・図：破線と網掛け）と外来遺物（表：白抜き・

図：実線）の状況は、質的には類似していることが分かる。しかし、量的に古代並行期ごろに奄美諸島地域に鉄器の出土が多いことや、本土系土師器の出土、12世紀段階の滑石製石鍋の出土量も多いことが指摘できる。一方、沖縄諸島には玉類が比較的多く出土することや、開元通宝が、沖縄諸島・先島諸島地域に多く出土しているという資料的な特徴がある。

遺物の分布図には、島内産の島嶼内消費物と交易物、外来産の島内消費物の多面性があるが、この場合、長距離交易という社会的背景を解釈のベースにすることにより、その意味が理解できてくる。このような特徴を、研究者が経験則からどのように解釈するかで、奄美諸島が特殊にみえるか、沖縄諸島が特殊に見えるか奄美・沖縄諸島が均質にみえるかが分かれる。

ただし、これは、在来の遺物分布圏が最も島嶼地域のアイデンティティーを反映しているとして解釈したものである。

### 3. 考古学とアイデンティティーについて

考古学とアイデンティティーの関わりについては、ある一定期間、地理的な一定領域をもつ物質文化に対して、それを生産・消費した集団の何らかのアイデンティティーを投影しようとする上述のような試みと、研究者自身のアイデンティティーが解釈に投影されている場合とがある。前者は、物質文化の分布や動きなどの背後に何らかの構造を読み取るという作業であるが、後者は、解釈の段階において研究者のアイデンティティーというフィルターに通されることである。

先史時代の考古学研究は、主として前者の概念に依っている。文献など他に補える資料がないからである。

「南島貝交易」は、日本本土地域を中心とした需要者のニーズに、南西諸島地域の供給者が対応した長距離交易である。供給者側は、貝の生態環境に左右されている可能性が高く、イモガイ・ゴホウラ交易においては最も採取量の多い沖縄諸島地域に、ヤコウガイ交易で

は奄美諸島地域に、その主要供給地が移動していると考えられる。このように交易のプロセスが詳細に分析されてゆくにつれて、外来物資の得られる供給地域は、南西諸島内でも一定地域に限定されるものではないようである。交易は、需要者・供給者がおり、どちらかが交易集団を擁し、それを管理するといったシステムが最低限必要であろう。また、情報の維持・管理、環境整備なども重要になると考えられる。弥生時代から中世までの長期的なスパンでは、当然、需要者も変わり、交易体制なども変化するだろう。一元的なプロセスでは理解できないのであり、より複雑なプロセスを経ている可能性が高い。

ここで、高梨修氏の論をあげると、ヤコウガイ交易は、「律令社会上層部の管理交易」であり、それに対して奄美諸島は、「首長層に束ねられた複合社会」であった。また、一定の「階層化社会」へ社会的な変化を遂げているとして、同時代の鉄器の大量出土や開元通宝の出土事実もそれを支持するものであるとする。また、この時期、本土における古代国家の南島政策拠点としての地域であるとの文献史学側の成果を応用し、中世までに変動を繰り返す国家の境界領域である奄美諸島地域の特質と、豊富な燃料を保持し、集約的土地利用できる自然環境の側面から、徳之島にカムイヤキ古窯群が設置されたとする説を提示している。また、琉球王国についても機能的側面から見れば、日本本土の「中世国家の境界領域に誕生した巨大交易機構」と捉えられとし、「琉球王国」の性格について斬新な切り口を提示していることは重要であろう。また、近年、安里進氏によって久米島で確認された「ヤコウガイ大量出土遺跡」の「大原ヤコウガイ加工場遺跡（仮称）」の存在自体が不明であるにも関わらず、その遺跡を用いて、「琉球王国論に収斂させている」論法として断じ、資料操作法について痛烈な批判を加えている。

安里進氏は、沖縄諸島における歴史時代への画期の重視と、国家形成をひとつの完成体

と捉え、沖縄諸島地域の貝交易活動を主軸とする社会と、南西諸島内における社会的優位性を描き出す。これによって、「王権」の成立を沖縄諸島の社会発展段階として、連続的に理解しようと試みている。しかし、先述のような高梨氏の批判もある。

古代並行期の奄美諸島が階層化された社会であり、南西諸島内でも外地との交渉において最も隆盛しており、外来物資を得ていたにも関わらず、対外的な文献に残る「王権」成立へは移行しなかった。する必要性がなかったという側面からも考える必要もあるだろう。古代奄美社会の構造の把握は、今後の研究にかかっている。しかし「琉球王国論収斂説」の批判者は、奄美諸島に対外的な記録を残す「王権」が生じなかった理由に答える必要があるだろう。

「ヤコウガイ大量出土遺跡」の分布を見ると(図3)、古代並行期の奄美諸島地域では、「ヤコウガイ大量出土遺跡」は、笠利町の東海岸側に集中し、ほかに名瀬市にも所在する。沖縄諸島地域では久米島に存在している。

「貝匙」の加工製作遺跡は、島嶼的にも島内でも、上記のように偏在していることが分かるが、同時期の集落の「集落間格差」の分析や、遺跡自体が交易拠点であるかの分析、また、同時期の遺跡間において、鉄器や開元通宝が遺跡間の差もなく出土する場合は、階層化社会想定補助材料としての性格も吟味する必要があるのではないかと思う。また、高梨氏も安里氏も、ほぼ同時期に存在する奄美諸島と久米島におけるヤコウガイ大量出土遺跡を認めているながら、遺跡相互の類似点や差異を、それぞれの論拠となる社会的背景のなかで相対化していない。お互いにこの地理的に離れた地域の遺跡の位置づけがあいまいのままになっている。上記のような、近年の奄美・沖縄の研究者の初期国家形成期の論考は、研究者同士の琉球王国論と日本古代・中世国家論のイデオロギーの対立にも読み取られかねない。研究者にはそのような意図はないはずであるが、現在の社会情勢でもわかるよう

に、国境や領域の問題は、感情をいたく刺激するのもまた事実である。

私は考古学における文献史学の利用を批判しているのでもなく、分析の切り口を批判しているのでもない。無文字時代にも適用できる理論や資料操作法を、考古学資料という同じ土俵で研究成果をぶつけ合うことも、今一度提案したいのである。それには最も基本となるのは、情報の一般化である。考古資料の公開が行われずに理論が先立っていく方向性は危険を孕む。

弥生時代～古墳時代並行期を見ても、奄美諸島が「南島貝交易」において仲介者集団として重要な役割をしていたと考えられる文脈は、考古学資料の検討からも存在する。古代～中世並行期のヤコウガイ交易・カムイヤキ交易においても日本古代・中世国家の境界領域としての役割が高梨氏によって想定されている。高梨氏のいうところの変動する「境界」や「辺境」とする奄美諸島が、相対的に個性の強い異なる文化圏の交差点であるとするならば、奄美諸島の特性は、そこをどのように認識できるのか、相対的に境界地域とみられる地域の文化的自律性をどう捉えるかが重要な視点であると考ええる。そのためには、考古学的に文化要素の分析を行い、あらためて質的に捉えなおす必要があると考える。文献史料のような為政者側の政治的記録からみた検討は、古代の奄美、中世の沖縄というように、どうしても一方向の領域や社会の様相が色濃く反映してしまう。また、島嶼地域においても、人間の活動は途切れることなく行われているわけであるから、一時期の歴史叙述だけでなく、その長期的なプロセスを把握する視点も必要であろう。

今回は、交易という観点から概観したが、高梨氏のように国家領域という観点において新しい交易像・奄美像が描ける可能性も指摘された。奄美諸島地域の考古学資料から抽出される現象は、弥生時代並行期の土器様式の問題にせよ、古代～中世の交易という問題にせよ、従来にない新たな歴史解釈・モデルの

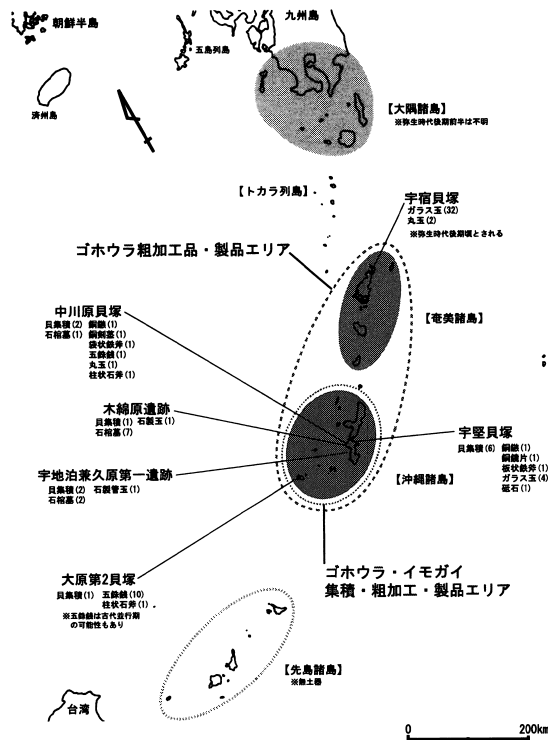


図1 縄文時代晩期末  
～弥生時代後期前半並行期  
※網掛けは土器様式圏、破線枠は在来の遺物分布

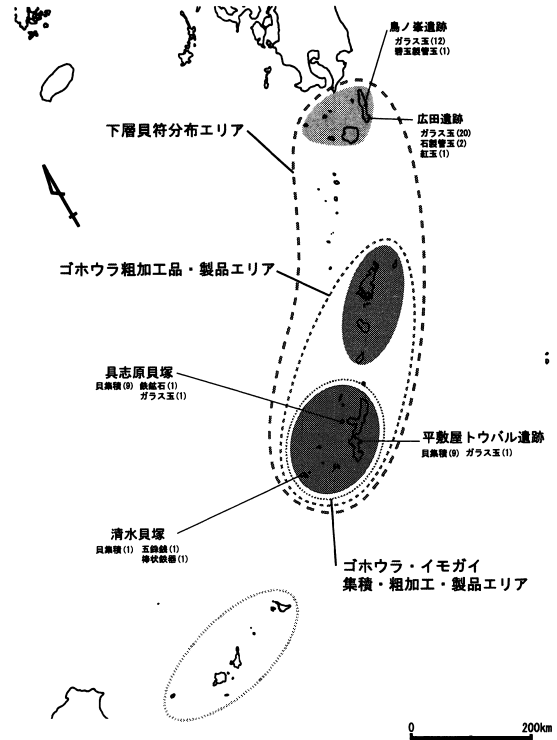


図2 弥生時代後期後半～古墳時代並行期

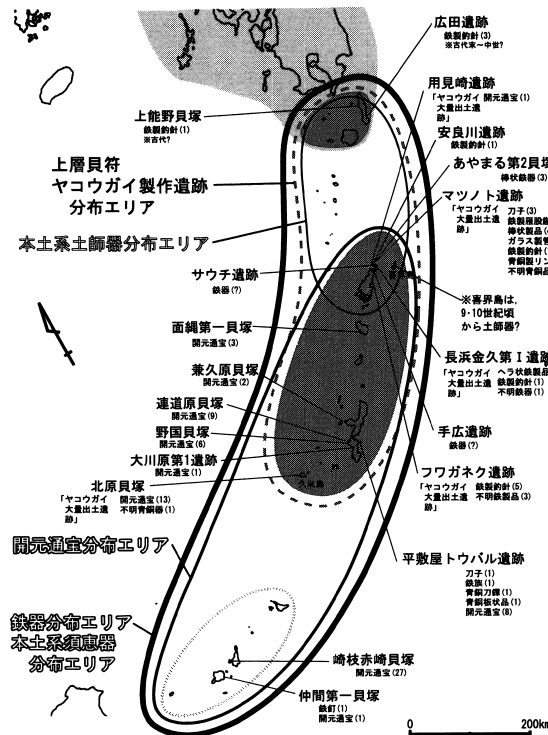


図3 古代並行期(7c-)  
※実線枠は外来遺物分布

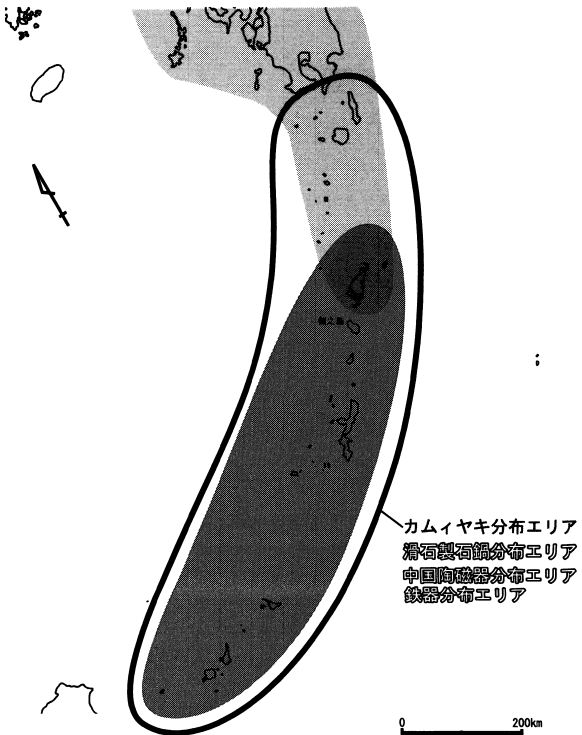


図4 古代末～中世初頭並行期(11-12c)  
※遺跡は膨大になるので、割愛した

構築が可能な地域であると思う。近年の研究もそれを支持しているのである。

※本稿は、2004年11月に和泊で行われたシンポジウム「新しい奄美世界の創出ー研究討論会：歴史・文化・アイデンティティーを奄美から考えるー」において配布した資料を一部改変して掲載した。

会場より先田光演氏より、沖永良部においてもゴホウラが多量に採取できるというお話をいただき、現段階では、奄美地方でゴホウラのストックは確認されていないが、将来確認される可能性はあるとお答えした。その後、文献にあたってみたが、管見の限りでは、現生貝類の生態学的な論文において、沖永良部島近海における大量のゴホウラの生息を論点にしたものを探し出すことはできなかった。おそらく、漁業をなりわいとしている人々からの聞き取りによって実態は分かると思う。今後、追跡調査を行いたいと考えている。

しかし筆者は、現段階における奄美・沖縄間の土器様式圏の違いと、ゴホウラ・イモガイの集積遺構の有無からみた違いを重視して、貝交易に対する地域ブロックごとの役割の違いをあらわしているものと推定している。

### 参考文献（刊行年順）

- 安里進『考古学からみた琉球史』（上）、ひるぎ社、1990年  
 安里進『考古学からみた琉球史』（下）、ひるぎ社、1991年  
 琉球新報社（編）『新琉球史ー古琉球編ー』新報出版、1991年  
 高良倉吉『琉球王国』岩波新書、1993年  
 永山修一「キガイガシマ・イオウガシマ考」『日本律令制論集』（下）笹山晴生先生還暦記念会、1993年  
 新川登亀男（編）『西海と南島の生活・文化』古代王権と交流8、名著出版、1995年  
 よみがえる古代の奄美実行委員会（編）『シンポジウム・よみがえる古代の奄美資料集』、1995年  
 木下尚子『南島貝文化の研究』法政大学出版、1996年  
 池畑耕一「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行

- 会、1998年  
 名瀬市教育委員会（編）『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流』、1999年  
 山里純一『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、1999年  
 古代学協会（編）『古代文化』第52巻第3号、2000年  
 小川英文（編）『交流の考古学』朝倉書店、2000年  
 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会（編）『東アジアの人と文化：高宮廣衛先生古稀記念論集』（上）、2000年  
 名瀬市教育委員会（編）『徳之島カムイヤキ窯跡群の世界』、2001年  
 沖縄考古学会（編）『南島考古』第20号、2001年  
 高梨修「知られざる奄美諸島史のダイナミズム」『沖縄文化研究』27法政大学沖縄文化研究所、2001年  
 木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易』、2002年（改訂版は2003年）  
 沖縄考古学会（編）『沖縄諸島の弥生時代並行期』、2002年  
 奄美群島交流推進事業文化交流部会実行委員会（催）『カムイヤキ古窯群シンポジウム』、2002年  
 豊見山和行（編）『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003年  
 高梨修「角田文衛『上代の種子島ー日本文化の南限についてー』の再検討ー琉球弧における古代～中世の国家境界認識ー」『法政考古学代30集』、2003年  
 新里亮人「徳之島カムイヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論究』（IV）龍田考古会、2003年  
 新田栄治「『島嶼王権』の形成と海域世界ー比較考古学と比較史の視点からー」『奄美ニューズレター』No.4 鹿児島大学、2004年  
 今帰仁村教育委員会（編）『グスク文化を考える』新人物往来者、2004年  
 高宮廣衛・知念勇（編）『考古資料大観1 2 貝塚後期文化』小学館 2004年  
 アジア史学会研究大会実行委員会（編）『アジアの中の沖縄』、2000年